

熊大通信

vol. 61
2016 SUMMER

【特集】
立ち上がり、考え、行動した。
熊大と
「熊本地震」



①工学部研究資料館／②4月16日 熊本大学黒髪体育館／③南区役所での熊助組の活動
④附属病院の院内学童保育／⑤黒髪避難所での体操／⑥授業再開後のキャンパス

熊大通信

vol. 61
2016 SUMMER

CONTENTS

- 03 立ち上がり、考え、行動した。
熊大と「熊本地震」
- 19 KUMADAI TOPICS
- 21 熊本大学基金よりお知らせ



旅する熊大／

熊本大学応援団チアリーダー部「BLAZES(ブレイジーズ)」

熊本大学応援団チアリーダー部BLAZESの練習風景。BLAZESは、6月に行われた第23回九州選手権大会にて、規定競技2位を獲得し、8月に東京で行われるJAPAN CUP 2016日本選手権大会への出場が決まっています。チームのはじけるような笑顔と、明るい掛け声が体育館中に響きます。

元気な学生の姿に、熊本、熊大の復興への思いを託しました。

熊本大学広報誌 熊大通信

* 皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。

[発行] 国立大学法人熊本大学
〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1
Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

[編集] 熊大通信編集委員会
大日方信春／委員長 法学部
大野 龍浩／文学部
松永 拓己／教育学部
岡本 洋一／大学院法曹養成研究科
光永 正治／大学院先端科学研究部
緒方 公一／大学院先端科学研究部
日浦 瑞枝／大学院生命科学研究部
首藤 剛／大学院生命科学研究部
田中 尚人／政策創造研究教育センター
後藤 正三／マーケティング推進部広報戦略室

[制作] 株式会社 談

平成28年熊本地震の規模および被害

平成28年4月14日、そして16日。2度連続の最大震度7という、我が国の観測史上例のない大地震が熊本で発生し、熊本県下にかつてない被害をもたらしました。混乱の中、本学では、災害対策本部を設置し、学生と教職員の安否や建物被害の状況確認など対応に着手。その一方で、学生たちは日頃の団結力を活かし、それぞれのキャンパスや各被災地での避難所などに多大な力を発揮しました。

■ 地震の規模

[4月14日21:26以降に発生した震度6弱以上の地震]

4月14日	21:26	震度7	熊本県熊本地方
	22:07	震度6弱	熊本県熊本地方
15日	0:03	震度6強	熊本県熊本地方
16日	1:25	震度7	熊本県熊本地方
	1:45	震度6弱	熊本県熊本地方
	3:55	震度6強	熊本県阿蘇地方
	9:48	震度6弱	熊本県熊本地方

■ 熊本県の被害

死者	75人 (震災の影響死を含む)
行方不明者	1人
重軽傷者	1,883人
全壊	8,241棟
半壊	25,663棟
避難所	99カ所 (最多855カ所 <4/17 9:00>)
避難者数最大	4,717人 (最多183,882人 <4/17 9:00>)

※7月11日16:50 熊本県地震対策本部第119報資料より

○阿蘇地域の交通網の遮断 (橋桁やトンネル、道路の崩落) や貴重な観光資源 (熊本城や阿蘇神社、水前寺成趣園など) にも大きなダメージを受けた。



五高記念館の倒壊した煙突



工学部研究棟11階実験室



理学部図書室の書棚

■ 熊本大学の被害

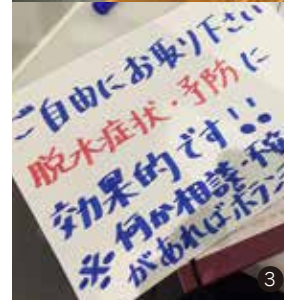
死者	0人
(4/27に全学生、4/22に全教職員に確認終了)	
重軽傷者	108人 <7/20時点> (学生97人、教職員11人)

4月16日～28日まで上水道および都市ガスが供給停止、電力は通常どおり供給 (上下水道の供給停止期間中一部のキャンパスでは井戸水を供給し対応)

立ち入り禁止建物	5棟
(国指定重要文化財3棟、工学部1号館、外来臨床研究棟)	
要修理および修理不能設備	2,432件 <7/20時点>

【学生の住居被害】 <学生の被災状況等調査による>

全壊	15人
大規模半壊	6人
半壊	108人
一部損壊	2,065人



立ち上がり、考え、行動した。熊大と「熊本地震」

本号の発刊にむけて

熊本地震を経験して私たちは、様々な課題に直面しました。大きな課題はマネジメントです。効果的なボランティアには組織だった動きが求められ、そのためには「司令塔」が欠かせません。発生直後の混乱時でも指示を出す人とそれを受けて活動する人にきっちり役割分担できたことが、円滑な支援につながりました。ボランティアに携わる人が無理なく動き続けるためには、いわゆるシフト制をしくことも求められました。さらに情報のマネジメントも重要です。物資が不足しているのはどこか、人手を必要としているのはどこか。学生たちはSNS*を使い最新の情報を共有することで的確な物資の供給を支援し、効果的なボランティア支援も行っています。地震で学校や幼稚園・保育園は休みになり子どもの受け入れ先もありませんでした。このことは、教職員の家庭でもおこりました。休校(園)時の子どもたちの世話もまた、大きな課題でした。ここでも学生たちが工夫し、活躍してくれました。熊大通信61号は、立ち上がり、考え、行動した学生と熊大の様子を特集しました。地震から学んだことは、学生にとっても大学にとっても大きな力になると考えています。

熊大通信編集委員長
おびなた のぶはる
大日方 信春

* SNS
ソーシャル・ネットワーキング・サービスの略。社会的な繋がりを作り出せるサービスのこと。登録し、誰かと繋がり、日記やメッセージを書いたり、誰かのメッセージにコメントをつけたりすることで、情報交換や会話をすることができる。

写真/①黒髪避難所の運営本部打合せ ②熊助組の活動 ③本荘避難所の掲示の一部 ④黒髪避難所にて保健学科の活動 ⑤教育学部の活動 ⑥避難者が集まる本震直後の武夫原グラウンド(4月16日午前3時)

全学体制の学生団体が力を発揮

黒髪キャンパス

熊大では、学部を越えて組織される学生団体があります。本震後約1000人が避難した黒髪キャンパスでは、そのような全学体制の学生団体が本部組織を立ち上げ、避難所運営を行いました。

運営本部立ち上げは、本震後午前3時

本震発生後、学生と地域の人を含め、約1000人が熊本大学へ避難しました。学生たちは発震から1時間半後には、運営にあたりました。「もともと、体育会、紫熊祭実行委員会、生協組織部は一緒に取り組むことが多いです。だから、緊急時にもまとまりやすかったと思います」。こう語るのは、体育会の幹事長を務める山崎皆実さんです。被災してすぐはサークル単位で動いていた学生たちですが、午前3時頃には各団体代表が集まって避難所運営本部が発足。同時に学生たちは役割分担をし、避難者の受付、誘導、物資の確認と配給、救護、留学生への英語対応も行いました。最初は食糧もなく、話し合いは余震におびえながらという状態でした。「そんな中でも、教育学部生涯スポーツ福祉課程の学生は車中避難していた高齢者の方を体育館に誘導してく

れたし、医学部保健学科の学生も最初から動いてくれました」と話すのは、紫熊祭実行委員会委員長の衛藤豊さんです。法学部学生で構成される志法会の庄野智之さんは、「志法会は日頃は他団体とかかわらないんですが、学生は団結力がありますから。熊大の避難所は学生が運営しているためか、特に明るい雰囲気がありました」。生協組織部の柴田昌樹さんは、「学生の運営本部解散の時、挨拶をしたら避難者の方々からわっと拍手が起こったんです。それが印象に残っています」。本部解散後しばらくして、「子どもと避難していた保護者の方からお礼の手紙をいただきました。子どもさんが熊大の学生になりたいと言っているそうで、うれしかったですね」と衛藤さんも振り返ります。

考える人と、動く人が別

「こういう非常事態では、考える人と動く人が別じゃないといけない。黒髪キャンパスでは、ボランティア活動に留学生たちも協力。多言語でのアナウンスなど、避難所運営に尽力しました。

多言語と異文化交流で、留学生も活躍

黒髪キャンパス／グローバル教育カレッジ

黒髪キャンパスには、寮などで暮らす外国人留学生も多数避難しました。真っ暗な中、はだして部屋を飛び出し、しまった学生も。避難所となった体育館には、熊大留学生だけでなく地域に暮らす外国人の姿もありました。彼ら彼女らにとっての不安は情報不足。外国人被災者への対応は、東日本大震災などでも課題となったことです。

留学生らは、避難所運営に携わった政策創造研究教育センターの安部美和特任助教の助言のもと、学生が運営する避難所運営本部とは別に、

外国語対応の受付を設置。交代で詰め、ライフラインや交通機関、地域の商店の開店状況などの情報を、英語、中国語などで掲示。アナウンスも多言語で行いました。「体育館にみんなといることで安心もできます。留学生自身のためでもあります。熊本で暮らす外国人のためにも活動したい」と留学生たち。熊大で身につけた日本語力や文化習慣への理解は、非常事態の外国人被災者にとって大きな力となりました。

留学生が先生に。地域住民も参加の異文化体験

グローバル教育カレッジオープン教育センターでは、留学生と協力し、4月25日から28日までの4日間、熊大生はもちろん地域住民も自由に参加できる活動を実施しました。外国語、日本語のレッスン、書道や折り紙などのほか、留学生



ライフラインや交通機関などの情報を多言語で掲示し、留学生や地域の外国の方に伝えました。

と感じました。今回僕は考える側に徹したので、動いてくれた後輩たちにすごく感謝しています」と庄野さん。山崎さんも「後輩たちは、自分も不安や恐怖で精神的にきつい中で動きっぱなし。もっとそこをケアできたらよかったです」と思っています」と後輩を思いやります。

学生たちは、本部が解散した後もそれぞれがボランティアを続行。「SNSによる情報拡散には問題もありましたが、本部解散以降のボランティアでは、ラインやツイッターで呼び掛けるのが最低でも10人は集まってくれたので助かりました」と話すのは衛藤さんです。学生たちは、避難者が眠る夜の見張り番なども担当。彼らの力が大いに発揮され地域住民が



体育会第57代幹事長
理学部理学科4年
やまさきみなみ
山崎皆実さん

紫熊祭実行委員会委員長
教育学部中学校教員養成課程3年
えとうゆたか
衛藤豊さん



トルコダンスをみんなで踊る様子

自身が先生となりヨガ、トルコダンスやポーランドダンス教室が開かれ、延べ269人の参加者が異文化体験を楽しみました。

留学生は大学が生活の中心ですが、地震で大学は長期休講に。この活動は、留学生をはじめ、被災した熊大生や地域住民にひと時の楽しみを提供し励まそうと企画されました。トルコダンスを教えた留学生のブルジュ・ソイサルさんは、「トルコダンスは、結婚式でみんな一緒に踊るもの。こういう時だからこそ、みんなでできるのがいいと思って」と話します。輪になり、軽快な音楽に合わせるのにはシンプルなお動作で、全員がすぐに動きを覚え、笑い声が絶えません。地震の恐怖と不安を忘れ、一歩ずつながらも日常に戻るための楽しいひと時となりました。

より安心できる避難所となりました。「僕たちがどうしたらいいか悩んだ時、頼れる大人もいてくれました。政策創造研究教育センターの安部美和特任助教もその一人。混乱の中、知識や経験が豊富で安心できる存在だったので、こんな人になりたいと、ちょっとした憧れを抱きました」と柴田さん。厳しい出来事ながら、座学では得られない多くを学んだ学生たち。巣立った後は、社会を支える頼もしい存在になってくれそうです。

より安心できる避難所となりました。「僕たちがどうしたらいいか悩んだ時、頼れる大人もいてくれました。政策創造研究教育センターの安部美和特任助教もその一人。混乱の中、知識や経験が豊富で安心できる存在だったので、こんな人になりたいと、ちょっとした憧れを抱きました」と柴田さん。厳しい出来事ながら、座学では得られない多くを学んだ学生たち。巣立った後は、社会を支える頼もしい存在になってくれそうです。



生協組織部
理学部理学科3年
しばたまさき
柴田昌樹さん

志法会
法学部法学科3年
しょうのともゆき
庄野智之さん

詳しくは、WEBマガジン「KUMADAI NOW (熊大なう。)」でも紹介しています。URL: <http://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/kouhoushi/kumadinow>

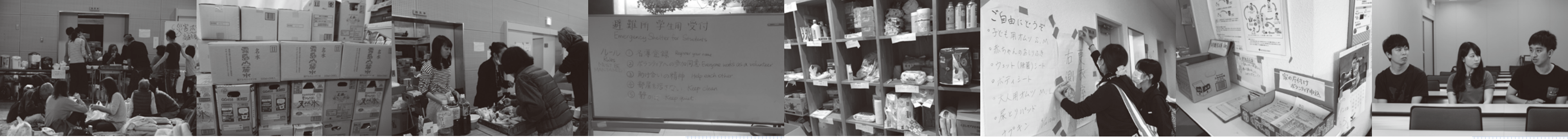
自ら気づき、動いた学生たち

自宅からすぐに駆けつけることができず、私が黒髪キャンパスの避難所に着いたのは16日の午前7時頃。すでに学生たちはどの団体が何をやるか役割分担もできていたので、各役割のブース設置とシフトを組んで対応するよう指示しました。

私は災害復興政策が専門です。外国人避難者向けのブースを別に設置するとか、混乱を避けるため支援物資の置き場所と配布場所を運営本部から離すなど、予測できることには対応して、あとは適宜動きましたが、学生たち自身が本当によく気づいて働いてくれました。避難所を閉める時は、解散は名残惜しいと言ってくれたおじいちゃんや、これからはたまに熊大に散歩に来ますと言ってくれた方も。学生たちは今回のことを振り返り、後輩たちに伝えられるよう記録を残そうとしています。自分が与えられたボランティア活動をやるだけでなく、ボランティアや避難所のマネジメントという、人を動かす時にどうすればいいのかわかる学生たちは学んだのではないのでしょうか。



あべみわ
安部美和 特任助教
政策創造研究
教育センター



届かない支援を学生の力でカバー

本荘キャンパス／働き部隊

本震後、本荘キャンパスでは、高齢者や体の不自由な人も含まれた地域住民を学生と教職員らが支援。そのほか、医学部生らが中心となり、学外の避難所を支援するグループ「働き部隊」も活躍しました。

バイタルチェックや健康状態把握に奮闘

避難者であふれかえった本荘キャンパス。その中には、高齢者や車いすの人も多く見受けられました。混乱の中、近隣に住む学生たちや駆けつけた教職員らは、保健学科が保有する毛布や枕、紙おむつなどを配布するため、階段を何度も行き来して運搬。避難者のバイタルチェックだけでなく、一人ひとりの支援必要度を把握するための聞き取り調査も実施し、緊急を要する人は医学部附属病院へ搬送しました。



医学部医学科5年
やまもと やすひろ
山元 康寛さん

介護者のいない車いすの人は、学生らが協力しマットに移すなどの介



医学部医学科2年
おがわ じゅんぺい
小川 純平さん

助を行いました。中には、長時間そのまま避難所にいると次の病気を発症するリスクが高いという人も。行政に福祉施設等への受け入れを依頼するも3日以上が経過。これ以上は待てないと判断した教職員らは、手分けして学生の実習先へ連絡し、受け入れてもらうことができました。支援が届かない中、学生と教職員らは専門性をフル活用し奮闘、避難者への対応にあたったのです。

約1000人が即集合
ほかの避難所を応援
本荘キャンパスにいた一人、医学

備品・施設そして専門知識 薬学部ならではの支援

大江キャンパス

地域の人の避難所となった薬学部の大江キャンパス。学生たちは、教員と協力して、薬学部という利点を生かし、学部内にある模擬薬局などを活用したボランティアを行いました。

大いに役立つ薬学部備品

「本震の時は体育館が停電し、真っ暗な中に何百人もの人を入れるわけにはいきませんでした。グラウンドを車のライトで照らし、そこに避難してもらいました」。当初の混乱をこう話すのは、大学院薬学教育部博士課程1年の今福匡司さんです。前震でめっちゃくちゃになった研究室などを片付けた矢先の深夜の出来事。「大きなけがをした市民の方がキャンパスにやってきていました。何人かの学生は、キャンパスの周辺の家を一軒一軒回り、薬学部へ避難できることを伝えました。薬学部には模擬薬局というものが、ベッドや薬があるんです。救急車は来ないため、先生や大学院生がここで応急処置をし、車で病院に搬送していました。避難所の衛生管理やおくすり手帳を活用した支援など、それは薬学部ならではのだったと思います。断水で、トイレの衛生状態が悪い時、各研究



大学院薬学教育部博士課程1年
いまふくだし
今福 匡司さん

室からポリ容器などを集めて池の水を使うことで、乗り越えることができました」。食糧への不安は、他の国立大学、共同研究先の企業や県外の卒業生がいち早く動き支援物資が届き、早期に解消されたそう。「県外に早めに避難した学生もそれぞれの場所募金活動をして、頑張っていましたよ」と話します。

緊急事態にも重要な リーダーシップ

「本震直後は、何をしたらいいかわかりませんでした。とにかくこれ



避難者の血圧などを計測し、健康管理に努めました

水もまったく届かず、働き部隊の支援がなかったら自分たちがどう動けたか想像もできません。

地震直後は支援物資の偏りが課題になりました。働き部隊はSNSをうまく活用する一方、自分たちの足で情報収集。20力以上の避難所を支援しました。「働き部隊以外にも、附属病院の職員の子どもの学童保育ボランティアや、避難生活を送る子どもたちへの音楽会も医学部生が開催しました。みんなフットワークが軽い。見ていてすごいと感じました」と、ほかの医学部生の活躍にも言及する山元さん。同じく働き部隊で活動した医学科2年の小川純平さんも「僕は大きな声を出して人を引っ張るタイプではないけど、毎日避難所で活動しているうちに顔を覚えてもらえるような、そんな息の長い支援ができた」と話します。孤軍奮闘した毎日、支えあった毎日、将来医療のプロとなる彼らの大きな学びの場となりました。

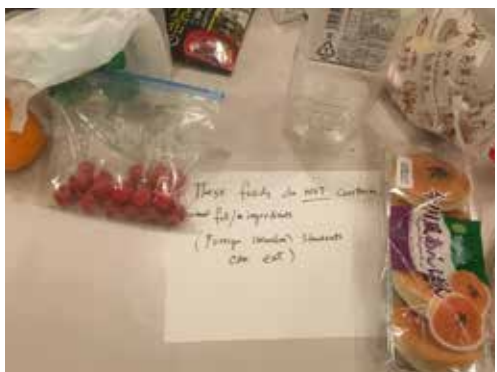


医学部保健学科4年
せぐち ゆか
瀬口 優香さん

をしたほうがいいと思うことを片っ端からやった感じです」と今福さん。薬学部長や東日本大震災での避難所支援の経験がある先生と避難してきた学生が中心となり、避難所運営は始まりました。薬学部だけのキャンパスなので先生と学生の距離が近いことが、この非常時に活かされました。薬学専門学校時代から地元に着した歴史がある薬学部だけに近所の住民も大変協力的でした。今福さんは「貴重な経験をしました。リーダーシップの大切さも学びました。手伝いたいけど、何をしたらいいかわからない人もいます。そういう人にも指示を出せるように」と話します。

「薬学部が避難所で良かった」「薬

学部のことは忘れません、そんな感謝の声も多く届きました。また、「将来は薬学部に行きたい」という子ども達からの感謝の手紙ももらいました。薬学部には、グラウンドや薬草園があり、避難した子ども達のストレス解消の場に。ピーク時は1000人近くの市民に対して、一つの学部だけで対応した避難所。体育館を一般市民用、宮本記念館を学生用の避難所と分けることで、学生のボランティア活動、留学生に対する支援、避難食のハラル（宗教的禁忌にふれない）対応などスムーズな運営ができていたとのこと。支え合い、非常事態を乗り切った大学と地域に、また新たな絆が生まれたようです。



(左) 避難所では宗教的禁忌にふれない食品を掲示、多様な文化や生活習慣に配慮しました(下) 薬学部内にある模擬薬局





仮説を立て、支援の課題を現場で解決

工学部公認学生災害復旧支援団体「熊助組」

熊本県全体のボランティア支援に力を注いだのは、工学部公認の学生災害復旧支援団体「熊助組」です。防災や、自然災害時の学生の社会貢献を目指し活動する学生団体が、本領を發揮しました。

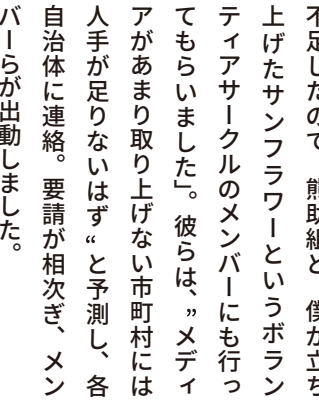
先を読み、必要なところへ

「黒髪キャンパスの避難所は熊本祭実行委員会などの学生団体が中心となって動いていたので、僕たちは16日のお昼から、全国からの支援物資の一次保管場所であるうまかな・よかなスタジアムに入りました。こう話すのは、熊助組代表の太田光さん。熊本市社会福祉協議会とは県や市の防災訓練で長くかかわってきた熊助組。すぐに社協に連絡を入れ、人手が不足していたうまかな・よかなスタジアムへと向かったのです。スタジアムに物資仕分けボランティアが揃った後は、「受け取り側」を



熊助組 大学院自然科学研究科博士前期課程2年 にしじま わたる 西嶋航さん

「熊本市の災害ボランティアセンターが立ち上がると運営側のスタッフが不足したので、熊助組と、僕が立ち上げたサンフラワーというボランティアサークルのメンバーにも行ってもらいました。彼らは、「メディアがあまり取り上げない市町村には人手が足りないはず」と予測し、各自治体に連絡。要請が相次ぎ、メンバーが出動しました。



熊助組代表 大学院自然科学研究科博士前期課程2年 おおた ひかる 太田光さん

建築学科生を集結し避難所施設を支援

工学部建築学科

東日本大震災の折に、避難所の避難者にプライバシー空間を提供した「紙管間仕切りシステム」。今回、熊本県内の避難所への導入に一役買ったのは、工学部建築学科を中心とするメンバーです。

研究室、大学を問わず 学生たちが集合

「紙管間仕切りシステム」は建築家の坂茂（ばんしげる）氏が開発したものです。坂設計事務所のスタッフの一人が大学院先端科学研究部の田中智之准教授と同じ研究室出身であった縁から、田中准教授を通じ坂茂設計事務所とNPO法人ボランティア・アーキテクト・ネットワークが支援を申し出。設置に大きな力を發揮したのが、田中研究室の学生を中心とした学生たちでした。

「田中先生から最初に呼ばれたのが4月20日。そこから僕たちが研究室、大学を問わず学生に呼び掛け、最終的には190人くらいのグループになりました」。活動の始まりを振り返るのは、田中研究室所属の博士前期課程1年・福岡海仁さんです。震災から約2カ月で設置ユニット数は1500を超えたと福岡さん。東日本大震災における約4カ月で18

今後も、長期的な支援活動を

熊助組の結成は、2007年6月。工学部と大学院自然科学研究科の学生が中心となって活動しています。「僕は、土木と防災・減災のあり方を熱心に教えてくださった山田文彦先生との出会いがきっかけで入りました」と太田さん。メンバーたちは日頃から、防災学習を実施したり、県内で実施される講習会、防災訓練などにも参加し活動しています。他大学とも交流があり、東北大学や長崎大学などから多くの支援も寄せられました。「特に東北大学は2回も来熊してくれて、今後ボランティアのニーズがどう変わっていくかなどのアドバイスもしてくれました」。

災害時、混乱している間はボランティアをする側と受け入れ側のミスマッチが起こります。「重裝備の人もいましたが、応急判定されていないうちからがれき撤去はできません。自分の得意分野を生かしたいという人は多いので、最初は難しかったみたいです。でも本来ボランティアは、被災地のために何でもする、という気持ちが必要だと思います。こう語るの、メンバーの一人、西嶋航さんです。団員のうち役員は、各地へ派遣するボランティアのコーディネーター役も務めています。大

00という数に比べるとはるかに早いペースで、家に帰ることのできない被災者の多さがうかがわれます。「避難者と直接話し感想を聞くことはあまりないんですが、まだどんな新しい発注が来ているから、必要とされていると感じます」と、建築学科4年の下田宇大さんも支援の手こたえを語ります。

まず動く、その大切さを目の当たりに

「最初は、僕たちが入ってくるのを見て何事か顔がされるんですけど、設置し終わってみると子どもたちが楽しんでうれしかったですね」と下田さん。福岡さんも、「震災で、なにか手助けをと思ってなかなか実行できません。でも、坂さんから声をかけていただいたので、実際に貢献できたのはありがたかったと思います」と話します。今回は、坂氏の動きの早さが印象



工学部建築学科4年 しもだ たかひろ 下田宇大さん
大学院自然科学研究科博士前期課程1年 ふくしま かいと 福岡海仁さん

に残っていると声を揃える二人。「たぶん、設置が未定のうちから資材の発注がかけられていました。建築は熟考してからアウトプットする作業ですが、緊急時にはすぐ動く、ということを経験させてもらいました。今はまだ学生なので同じようにはいきませんが、そういう部分に考えが至るだけでも今後が違ってくると思います」と福岡さん。いろいろな支援の中で、「間仕切りという発想には建築をやっているから行き着けるし、そこから実際の行動に移せる人も限られていきます。大学の課題も大変なんですけど、建築を学ぶ僕たちがやらなきゃ、って感じですよ」と話すのは下田さんです。日々の勉強や課題に追われながらも、被災された方のために、土日に加えて平日もボランティアに費やす日々を送っていました。

宇土小学校体育館で、紙管間仕切りを設置している様子。避難者の方がすでにいる体育館だったため、声かけをして少しずつ設置した



菊池市での活動前のグループミーティング



熊本市南区役所での物資の仕分け配付の様子



詳しくは、WEBマガジン「KUMADAI NOW（熊大なう）」でも紹介しています。 URL: http://www.kumamoto-u.ac.jp/daigakujouhou/kouhou/kouhoushi/kumadainow

後も長期的にボランティア活動を続けます。必要な時、必要なところに必要な人を。日頃の学習や訓練で、ボランティアのあるべき姿をしっぴりと描く熊助組を代表する二人だからこそその力強い言葉です。

様々な年齢に対応する「即席寺子屋」が実現

教育学部

想定外の地震被害により、熊本県では多くの小中学校、高校、そして大学も長期の休校を余儀なくされました。そこで活躍したのが教育学部の学生たち。95名の学生たちが、県内9カ所の小中学校で子どもたちの相手をするボランティアを行いました。

学校が休みの間、子どもたちを見守り先生にも遊び相手にも

教育学部生のボランティアは、避難所生活を送る子どもたちや、親が仕事に出かけてしまい一人で過ごさねばならない子どもたちを見守り、居場所をつくることが目的でした。教育学部生が通った小中学校のうちの1つ、託麻原小学校で活動していたのは、小学校教員養成課程3年の中嶋梨恵さんです。「最初はお互いに緊張していましたが、授業をしたり遊んだりしているうちに、打ち解けることができました。大学では実習以外に子どもたちと直接かかわる



子どもたちの勉強を見る様子

ことがないので、自分の学びの場にもなりました」と話します。実習では同じ年齢の子どもを相手にしますが、避難所にいる子どもたちの年齢はさまざま。当初は遊びを中心にしていたボランティア計画も、小さな子どもたちとは思いきり遊び、中学生には勉強を教えるなど、学生たちは自ら時間割を作成し活動。同じく3年の立石敬信さんは「先生というより友だち感覚で子どもたちに接しました。教育実習とは違い、のびのびと子どもたちとかわるることができて、ボランティアをしてよかったです」と思っています。と元気にグラウンドを駆け回る子どもたちとバスケットボールをしていました。同じく1年の松原佑華さんは、大学に入学したばかり。「怖い思いをして元気がない子どもたちが気になるので、学校に行けなくても楽しいことがあると思ってもらい、子どもたちの力になればと活動しています」と語りました。



時には子どもたちと体を動かすなどメリハリのある活動を工夫しました

学生にとっても実習では得られない体験

学生たちの活動は4月25日から5月8日まで続きました。ボランティアを計画したのは、教育学部の藤中隆久教授。「地震の影響で、大学が休校になりその期間私たち教員も学生も何をすべきか考えたときに思いついたのが今回のボランティアでした」と語ります。藤中教授に打診された高崎文子准教授が心理学科の学生らに呼び掛け、SNSを通して学生らが集まり、95名が登録しました。ボランティアに詳しい八ツ塚一朗准教授も加わり、説明会を開催してから学生たちを9カ所の小中学校と施設へ送り出しました。八ツ塚准教授からは、「学生たちは、教育実習では経験しない、いろいろな年齢層の子を見る寺子屋の先生のような経験をしました。メリハリのある時間割をつくったり、イベントを企画したりと、こちらが予想した

震災から生まれた絆 学生を支えた大学間連携

九州大学法学部

学生らが勉強や研究の中断を余儀なくされる中、熊大法学部生の受け入れを行ったのは九州大学法学部です。同学部の南野森教授と、支援を受けた熊大法学部3年の野畑美帆さんに話を伺いました。

学生の「日常」を取り戻すために

熊本地震では、多くの大学から熊大に支援が届きました。その中で、九州大学法学部が学生の受け入れを申し出てくれたきっかけは、熊大法学部の大日方信春教授が発した、熊大の被災状況を知らせるツイッター



(上) 熊大生が参加した講義の様子 (左) 野畑さんが参加したゼミの様子



九州大学法学部教授
みなみのしげる
南野森教授

「震災という非日常の中で気づく日常」の価値。大学連携が、勉強という日常を取り戻してくれました。

です。それを見た九州大学法学部の南野森教授はすぐに受け入れを決意。「福岡に滞在できる学生は九州大学法学部の講義を聴講してはどうかと、大日方先生に提案しました」。新学期がスタートしたばかりというタイミングは、講義内容も初歩的でゼミも始まったばかりだったので、受け入れやすかったと南野教授は話します。さらに「法学は、大講義室で大勢が一度に受講するスタイルが多い。学生が200人から210人が増えたところで、だれも迷惑はしない。非常時ですから、できることを、できる範囲でやろうとしただけです」。それは、被災した学生も同じだと、教授は言います。「中には、被災地で頑張っている人もいるのに、自分だけ避難しているのか、と悩む学生もいます。でも、こんな時だからこそ、静かに落ち着いて机に座ることのできる環境は大事なんです」。震災という非日常の中で気づく「日常」の価値。大学連携が、勉強という日常を取り戻してくれました。



法学部法学科3年のばたみほ
野畑美帆さん

辛い経験、でも、よい刺激になった2週間

「南野先生の動きの早さが印象的でした。九州大学でゼミを受け始めてからも、たとえば文系の図書館も使いたいと要望するとすぐに動いてくださる。本当にありがたかったです。法学科3年になったばかりで被災した野畑美帆さん。熊大ではまだ、ゼミで自己紹介をした程度」でした。九州大学の支援によってゼミというものを知ることでできただけでなく、「とても議論が活発で、4時40分から、夜8時頃まで続くんです。先生も学生もフレンドリーで温かく迎えてくれました」

野畑さんは福岡の実家から2週間、九州大学に通学。「熊本には勉強できない学生もいるのに、という罪悪感もありました。でも南野先生が、そんなことは気にしなくていい、今できることを一生懸命やりなさいと言ってくださって。大変な経験でしたが、前向きにとらえて進んでいきたいと思っています」

以上に様々な工夫をしてくれました。ボランティアに来てもらった方も、行った方にも意味のある活動になりました」と話します。高崎准教授も「何かをしたいとみんな思っていた。その機会を与えられたという喜びもあったと思います。大きな収穫のある経験をした学生たちが、教壇に立つ日が楽しみです」。



教育学部小学校教員養成課程3年
なかしまりえ
中嶋梨恵さん



教育学部小学校教員養成課程3年
たていしけいしん
立石敬信さん



教育学部小学校教員養成課程1年
まつばらゆうか
松原佑華さん

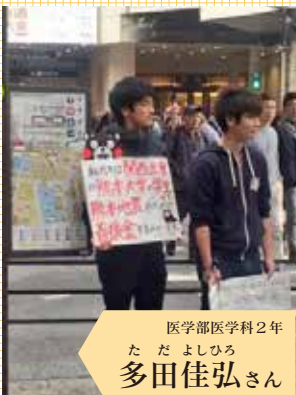
今自分にできることを！ 各地で募金活動を行った熊大生

一時避難をして、出身地に帰郷した熊大生の中には、残してきた仲間や、熊本の現状に思いをはせ、今自分ができることをと考え、行動し被災地熊本の窮状を訴え、全国各地で募金活動を行いました。



文学部コミュニケーション情報学科2年
きゆうなひとみ
喜友名仁美さん

▶ 沖縄県の中心市街地国際通りにて、募金を行うためにSNSで呼びかけて集まった仲間とともに募金活動を行いました



医学部医学科2年
ただしひろ
多田佳弘さん

▶ SNSを使って関西出身の熊大生を集め、大阪市にある熊大の関西オフィスを拠点にし、募金活動を行いました

次々に患者を受け入れ。地域医療「最後の砦」

多くの病院が機能を停止する中、地域医療の「中核病院」として機能を維持し続けた医学部附属病院。その裏には、2000名の職員および医学部生らの奮闘がありました。

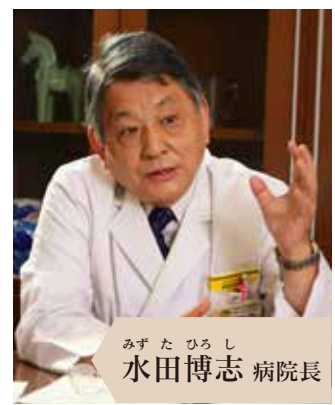
様々な課題を解決し、体制維持に奔走

4月14日午後9時26分の1回目の地震の後、時計が10時を刻むのを待たずして、医学部附属病院（以下、附属病院）に災害対策本部が発足。この時はライフラインもほぼ無事で、トリアージ体制が整えられました。そして起こった16日未明の本震。「まずは電気を回復させるため事務や施設担当者が奔走。そのうちに、市民病院をはじめ機能がストップした総合病院が開始、重症患者から順次受け入れられました。透析を行う病院や産婦人科病院も機能が止まり、附属病院ではそちらも受け入れを決定。16日の入院患者受け入れ数を合わせ1日で約100名を超え、ベッドは廊下にもあふれました。ところが附属病院も、生命線である水が止まりました。「透析や手術など病院で一日に必要な水は100トン。あらゆる方法を検討した結果、熊本県の医療福祉部が協力してく

れ、自衛隊が毎日ピストン輸送してくれることになりました。これが17日から25日まで続き、通常業務に当たることができました」

「16日の午前2時くらいには、すごい数の職員が病院に来ていました。震度6以上が発生すれば病院へ集まるというマニュアルはありますが、中には被災しながらも駆け付けてくれた職員もいたと思います。職員たちは各部門でリーダーを配置し、混乱することなく、次々に運ばれてくる患者への対応にあたりました。

もう一つ問題となったのが、職員の子どもたちが通う学校が休みとなってしまうこと。子育て中の職員は、地震の心配もあり子どもだけを置いて家を離れられないという状



水田博志 病院長

ライフライン

- 本震後、井戸水の濁りが生じ、水道水と都市ガスは供給停止（電気は1時間半後に再開）
- 早急に井戸水の濁りの解消を図り、16日（土）より透析再開
- 水道水は、4月17日～25日、陸上自衛隊の給水車で計485トン（のべ98台分）の供給を受ける

救急搬送患者（地震関連）の受け入れ

患者数：303名 内、入院患者数：158名（4月14日～27日）

他医療機関で診療継続が困難な患者の受け入れ

透析患者受け入れ：42名106件 化学療法受け入れ：18名19件（4月15日～27日）

他医療機関の重症患者の受け入れ

熊本市市民病院からの移送患者84名を含む101名（4月16日～20日）
産科受け入れ：39名 NICU受け入れ：11名（4月15日～27日）

大学病院での診療・手術件数

外来患者数：7041名 手術件数（緊急手術）：169（14）名（4月18日～26日）



況になってしまいました。そこで病院は、子どもたちを預かる学童保育を決定。「これには、多くの医学部生が協力してくれて本当に一生懸命やってくれました」。2000名の職員と学生の奮闘があったからこそ、想定を超える非常事態に熊本県の医療を支える「中核病院」としての役割を果たせたと水田病院長は話します。

自然災害に負けない国に

前震直後から調査団を組織し調査結果を次々とまとめ、復興への足場づくりも着々と進めているのが、大学院自然科学研究科附属減災型社会システム実践教育センターです。

ここまで壊れるかと感じた本震の威力

熊本地震の約3年前の平成25年3月、松田泰治センター長はじめ大学院自然科学研究科附属減災型社会システム実践教育センター（以下、減災センター）のメンバーは熊本県の地域防災計画の策定に関わり、M7.9を想定した布田川・日奈久断層による直下型地震に対する被害想定結果を県に提出しました。地元新聞でも7回にわたって報じられましたが、県民の防災意識を十分喚起できず、情報の伝え方も「今後の課題」と松田教授は話します。

熊本地震では土木学会の西部支部で緊急調査団が組織されました。前震直後から益城町と南阿蘇村の調査を行った松田教授は「14日は、基本的には老朽化した旧耐震の建物が倒壊している印象でしたが、16日の本震後は、あたり一面が倒壊してしま

観測データからも、強く水平に揺さぶられたことがわかっており、「非常に厳しい地震であったと言えます」。

熊大だからこそ担える知見を今後に生かす役割

橋梁が専門の松田教授の調査では、高速道路は耐震補強がされていました。が、高速道路をまたぐ跨道橋に被害が多かったことや、新幹線の高架は新耐震構造で被害が軽微だったものの、重い防音壁の落下などが報告されています。減災センターの鳥井真之特任准教授の調査では、地盤が同じ阿蘇起源の火砕流堆積物を持つ地域でも、溶結度の違いなど地質によって被害に差があることや、想定内だった布田川・日奈久断層帯の地表地震断層のずれに対し、阿蘇カルデラ内の阿蘇谷で見られる地震動の原因として形成された断層は研究者にも予想外だったことが分かりました。センター以外の熊大教員らの調査でも、熊本地震では断層の横ずれ以外でも破壊が進んでいる可能性が高いこと、地震動による斜面の深層・



表層崩壊による深刻な土石流発生の可能性、熊本城や県内の石橋、住宅や店舗など建築物の詳細な被害状況が次々に報告されています。

「被害のひどかった地域には、古くても残った建物、新耐震基準でも損傷した建物があります。一つひとつ調べていけば残った理由がわかり、今後の設計に役立ちます」と松田教授。また、「社会基盤施設を長期に維持管理していくことは国の課題。被災事例を調査していけば、壊れにくい、または壊れても修復を容易にする合理的維持管理の仕方がわかるはずです。今後は学会等が行う被災原因の解明にも熊大が全面的に協力していきます」。熊本大学だからこそ担える、自然災害にまけない熊本の再生を見据えています。



松田泰治 教授
大学院自然科学研究科
附属減災型社会システム実践教育センター
センター長

大学院自然科学研究科附属減災型社会システム実践教育センター
減災センター被災地調査等の資料・報告書はこちらからご覧いただけます。
<http://iresc.kumamoto-u.ac.jp/>

失われたら取り戻せない 歴史ある建造物を守る

五高記念館館長・大学院先端科学研究部 伊東龍一教授

4つの国指定重要文化財のうち、五高記念館では二本の煙突が倒れ、工学部研究資料館は瓦の落下や壁の亀裂、化学実験場も煙突が倒れ雨漏りが発生しました。「五高記念館には、内部に貴重な資料も展示、保管されています。五高記念館スタッフはもちろん文学部の先生方が駆けつけてくださり、みんなで運び出しました」と伊東教授。工学部研究資料館にも、建物とともに重要文化財に指定されている明治から大正期の貴重な機械が動く状態で保存されており、この機械も、安全を確認しながらできるだけ早く搬出する予定です。

もう一つの重要文化財である表門（通称・赤門）については、「図面上ひよっとして内部に鉄筋が入っているのではと考えられていました。今回、びくともしていないので、実際入っているのかもしれない。また、被害が出たとは言え、「五高記念館も正面から見るとレンガの壁が崩れるということもほとんどなく何でもないぞ」という顔をして建っていますよ



ね。今後、全国の指定文化財の修理補修を行う財団法人文化財建造物保存技術協会が調査に入り、修復計画が進められる予定となっています。

学長メッセージ

元に戻すだけではない。 さらなる飛躍を目指す 「復興」を熊大から

熊本大学長 原田 信志

この度の熊本地震におきまして、被災された皆さま方へ心よりお見舞いを申し上げます。また、本学に対する、他大学、病院、研究機関、企業、国際機関、国および自治体からの多大なるご支援に、深く感謝申し上げます。本学では地震発生直後より災害対策本部を設置し、学生および教職員の安全確認、建物や設備の被害の把握、復旧作業等に全力を傾けてまいりました。

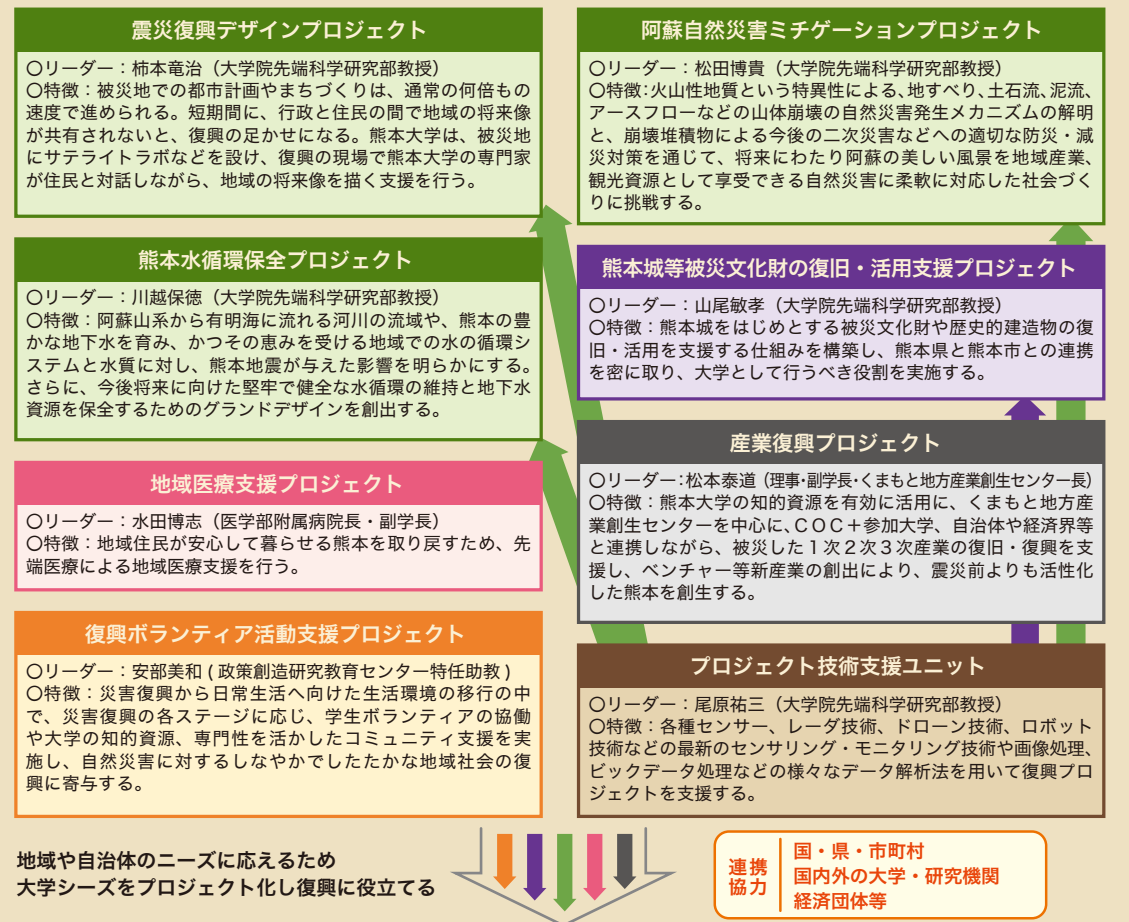


大学の3つのキャンパスと附属小中学校は一時避難所に指定されています。多くの地域住民も避難し混乱する中、活躍したのが学生です。支援に求められた自治体職員の方からは、熊大生の「創造的避難所運営」を称賛頂きました。専門性や日頃の団結力を活かした学生らの支援は本学以外の避難所にもおよび、数々の感謝

の言葉を頂戴しています。私は黒髪キャンパスの近くに住んでいます。その地域の方々から「熊大生を見直しました」と言っていたきました。私自身もあらためて、本学学生の主体性や行動力に感服しました。幸い、本学には災害復興を専門とする教員も在籍しており、その指示を仰ぎながら、学生らが力を発揮した避難所運営のやり方は、近隣の中

熊本大学復興支援プロジェクト

熊本ならではの調査・分析・研究で復興を強力に牽引
地域に根ざした国立大学として、熊本に関する多様な研究課題にも取り組んできた熊本大学。熊本地震発生後は、これまでの知見や地震後の調査・分析を復興に役立てたいと、研究者らがさまざまな提案を行っています。そこで本学では、それらを組織化した「熊本復興支援プロジェクト」を立ち上げました。



世界を目指す研究拠点大学であること、地域のグローバル化を牽引する国際教育の充実、熊本の若者を熊本に定着させるための産学官連携、これらが本学の本来の役割であり、まずは早急にその役割を担う体制に戻すことが求められます。また、本学の各分野の研究成果を活かした復興支援、そして特に地震に関連した新しい分野の活性化を目指すことも本学が担う大切な役割です。

学生たちは非常事態を経験したことで、学問に対しより積極的な姿勢を見せています。また教員と職員にも、この状況を一丸となって乗り越えるために職種を超えた密なコミュニケーションが生まれました。熊本地震を経て生まれたこの「下地」を大いに活用し、本学をさらによりよくするためのエネルギーにしていかなければならないと考えます。

復興は、単に元に戻すのではなく、さらに飛躍するという心構えがなければ

ば進みません。敗戦後の日本を若い力が復興させたように、若い人には苦境にあっても未来を見る力があり、「自分がやらねば」と思える力があります。その力を今、熊本だけでなく日本全体の活性化につなげていくことが教育・研究機関である我々の務めであると考

**熊本大学復興広報
キャンペーン**

復興の意気や溢る
Full of Kumamoto University Spirit

熊本大学
(五高寮歌より)

「熊本地震」は、最大震度7の地震が同じ場所で2回起きる観測史上類をみないもので、本学にも大きな被害をもたらしました。この災害から復興し、本学の教育力、研究力、そして社会貢献力を更に大きく飛躍させ、研究拠点大学、地域に貢献する大学、国際化した大学として貢献するためキャンペーンを実施します。

キャッチフレーズ「復興の意気や溢る熊本大学」は、本学の前身の一つである旧制第五高等学校（五高）寮歌（武夫原頭に草萌えて）の一篇「意気や溢る五高魂」から取りました。五高魂とは、五高で受け継がれてきた「剛毅本誦（ごうきぼくとつ）」の精神をいいます。未曾有の災害復興に、私たちは五高魂を受け継ぐ「熊大スピリット」で立ち向かいたい。その心意気を表しました。

産官学の総力を結集し、熊本復興を早期実現

たくさんのご支援、 ありがとうございました。

多くの方々から、本学の早期復旧のためにいただいているご支援について感謝申し上げます。

熊本大学は、皆様からいただいた支援を復興の推進力とし、一日も早い復帰を遂げ、被災前を上回る大学へと飛躍できるよう努めてまいります。

避難所運営等に必要な物資の支援

<企業：16社>
(株)ジャパネットたかた、日立造船(株)、九州電力(株)、(株)ムラタ溶研、三菱商事(株)、(株)神戸製鋼所、(株)恵信工業、新日鐵住金(株)、ジブラルタ生命保険(株)、(株)リケン、日鉄鉱業(株)、丸三産業(株)、岩谷産業(株)、大正製薬(株)、九動(株)、税理士法人近代経営
<国立大学：9大学>
山梨大学、奈良先端科学技術大学、山口大学、九州大学、九州工業大学、佐賀大学、長崎大学、宮崎大学、鹿児島大学

学生教育への支援

(学生への図書館開放(大学等)：53大学)
(留学生への避難支援及び各種相談対応等：11機関)
(授業科目の開放：3大学)
九州大学、鹿児島大学、広島大学
(大学院生への研究指導支援：4大学)
千葉大学、広島大学、山口大学、九州大学
(その他：法科大学院協会からの支援要請を受けて
千葉大学1名、九州大学3名受入)

就職への支援

(学生向け就職セミナーへの参加受入)
九州大学
(その他：各企業で就職活動に配慮)

復旧のための業務支援

(施設調査に係る人的支援：6大学)
九州大学、佐賀大学、長崎大学、宮崎大学、
鹿児島大学、琉球大学
(ボランティア活動支援：2大学)
東北大学、宮城教育大学

基金・寄附

P21-22をご覧ください。

附属病院への支援

(物的支援)
<病院等：1病院、1保健所>
桜十字病院、諫早保健所
<企業：2社>
(有)エマーゼンシー、(株)大塚製薬
<官公庁：2機関>
熊本県庁、防衛省
<私立大学：2大学>
福岡大学、久留米大学
<国立大学：6大学>
九州大学、佐賀大学、長崎大学、大分大学、
宮崎大学、鹿児島大学

研究継続への支援

(研究機器の無償利用等表明)
<企業：2社>
コーニングインターナショナル(株)、田淵電機(株)
<私立大学：1大学>
藤田保健衛生大学
<大学共同利用機関法人等：8法人等>
自然科学研究機構、情報・システム研究機構、物質・材料研究機構、科学技術振興機構、理化学研究所、九州先端科学技術研究所、アステラス病態代謝研究会、日本医療研究開発機構
<国立大学：11大学>
北海道大学、帯広畜産大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、岡山大学、
広島大学、九州大学

被災した学生・入学希望者の皆さんを 熊大は全力で応援します！

【被災学生に対する支援】

入学料・授業料免除(熊本地震に伴う大学独自の免除制度)

- 支援内容
被災状況に応じて入学料・授業料の減免もしくは全額免除
- 対象者
・学費負担者が災害救助法適用地域に居住し、市区町村長又は消防署長が証明する「り災証明書」により、その家屋等が全壊、大規模半壊、半壊等であると証明された者
・学費負担者が震災により死亡(行方不明を含む。)した者
- 問合せ
学生支援部学務課経済支援担当(TEL:096-342-2126)

熊大復興の意気や溢るる奨学金(給付型) (熊本地震復興事業基金等による熊本大学独自の奨学金)

- 支援内容
①緊急支援一時金(平成28年度) 10万円
②緊急支援奨学金(平成28年度、29年度) 120万円
(年間給付額)
- 対象者
・学費負担者が死亡又は行方不明の者(①、②)
・学費負担者が失業又は就業の見込みが立たないことに伴い経済的に困窮している者(①、②)
・学費負担者の家屋が全壊、大規模半壊及び半壊の者(①)
・学費負担者の家屋が全壊及び大規模半壊の者(②)
・学生本人(自宅外通学)のアパート等の一部損壊等により転居した者(①)
・怪我等をして入院した者(①)
- 募集時期
熊本大学公式ウェブサイトでお知らせします。
- 問合せ
学生支援部学務課(TEL:096-342-2123)

住まいの支援(学生寄宿舎)

- 学生支援部学務課生活支援担当
(TEL:096-342-2124)にお問い合わせください。

【学生支援情報】

メンタルヘルス

- 震災により、心と体の悩みを抱えている方はお気軽にご相談ください。
・学生支援室(TEL:096-342-2765、2766)
臨床心理士1名(女性)、キャンパスソーシャルワーカー

- 1名(女性)
・保健センター(TEL:096-342-2164)
医師2名(男性)、看護師2名(女性)、臨床心理士1名(女性)
・学生相談室(TEL:096-342-2128)
キャンパスソーシャルワーカー1名(女性)

【入学志願者に対する支援】

入学検定料免除

- 支援内容
入学検定料の全額免除
- 対象者
・災害救助法適用の地域で被災した世帯の学生で、家計急変のため修学が困難となった者
・学費負担者が災害救助法適用地域に居住し、公的機関発行の「罹災証明書」により、家屋が全壊、大規模半壊、半壊及び流失したと証明された者
・学費負担者が震災により死亡(行方不明を含む。)した者
- 申請に関しては各募集要項をご覧ください。
- 問合せ
学生支援部入試課(TEL:096-342-2148)



落ち着きを取り戻した学内では、学生たちが被災前と同じように勉学に取り組んでいます

熊本大学・東北大学連携震災関連市民公開講座(仮)を開催します

熊本地震から6か月、東日本大震災から5年。医学・薬学・工学・理学・文学の知を集め、地域と共に健康・安全・防災・減災について考えます！

【開催日時・場所】
平成28年10月8日(土) 午後
熊本大学薬学部多目的ホール、
宮本記念館および第一講義室

【参加対象者】
一般の方どなたでも
(学内からの参加も可能です)

【参加費】 無料
【問い合わせ先】
熊本大学 教育研究支援部 生命科学系事務課
リーディングプログラム推進チーム

TEL: 096-373-5785・5006
【URL】
<http://higoprogram.jp/>



平成28年度ひらめき☆ときめきサイエンスプログラムを実施します！

- ① 未来の私を守るのは今の私。若い女性がかかる子宮頸がんは予防できることを学ぼう！
- ② 作って贈ろう全国へ！盲学校用おしゃべり学習器のものづくり教室

研究機関で行っている最先端の科研費の研究成果について、高校生・高専生の皆さんが、直に見る、聞く、ふれることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラムです。

【開催日時・場所】
① 平成28年 8月11日(木)
熊本大学 薬学部(大江キャンパス)
② 平成28年 9月25日(日)
熊本大学 黒髪南キャンパス
工学部研究棟 IV 1階 基礎実験室

【参加対象者】
①② 高校生※事前申込が必要で
(1)WEB申込の方法
日本学術振興会 HP
(<http://www.jsps.go.jp/hirameki/>)のメニューにある「実施プログラム一覧」のページから参加申込をクリックして、必要事項を入力

(2)本学への直接申込
①住所:〒862-0973
熊本県熊本市中央区大江本町5-1
TEL(FAX): 096-371-4160
E-mail: arimah@gpo.kumamoto-u.ac.jp

有馬 英俊(ありま ひでとし) 熊本大学
大学院生命科学研究部(薬学系)・教授
申込締切日: 平成28年7月29日(金)
※当プログラムは、定員を超えた場合は申込締切日後に抽選を行い、8月3日(水)までに郵便(またはメール)にて全員にご連絡します。
②住所: 〒860-8555
熊本市中央区黒髪2丁目39番地1号
TEL(FAX): 096-342-3623 (096-342-3630)
E-mail: hiratoki2016@tech.eng.kumamoto-u.ac.jp
須惠 耕二(すえ こうじ) 熊本大学 工学部
技術部・技術専門職員
申込締切日: 平成28年9月2日(金)
※当プログラムは、定員を超えた場合は申込締切日後に抽選を行い、9月9日(金)までに郵便(またはメール)にて全員にご連絡します。
※申込の際は、下記の必要事項を記入のうえ、メール、FAX等で送付してください。
1. 参加プログラム名・日付
2. 氏名(フリガナ)
3. 学校名・学年
4. 性別

5. 生年月日
6. 連絡先住所(郵便番号)
7. 電話番号、FAX番号(無ければ空欄可)、E-mail(無ければ空欄可、携帯メール記載の場合は受信拒否解除設定願います。)
8. 保護者からの参加同意の有無
9. 家族・学校関係者見学(参観)者の有無(「有」の場合、見学(参観)者の氏名(フリガナ))
10. 応募するにあたって(聞きたいこと、知りたいこと等があれば記入)
【参加費】
無料
【問い合わせ先】
熊本大学 マーケティング推進部 研究推進課
TEL 096-342-3242
E-mail: gjk-somu@jimu.kumamoto-u.ac.jp
【URL】
日本学術振興会ホームページ
<http://www.jsps.go.jp/hirameki/>
熊本大学ホームページ
<http://www.kumamoto-u.ac.jp/kenkyuu/news/>

「第9回 くまもと都市戦略会議」が開催されました

熊本県と熊本市、熊本大学、熊本の経済2団体のトップが集う「くまもと都市戦略会議」が6月27日に開催されました。

この日の会議では、熊本経済同友会、県商工会連合会、県中小企業団体中央会、県経営者協会、熊本商工会議所の熊本経済5団体から、熊本地震からの創造的復興に向けた緊急提言が熊本県、熊本市、熊本大学に提出され、創造的復興に向けた宣言を決議しました。

本学では熊本復興支援プロジェクトを始動しており、大学のシーズを創造的復興に向けて役立てていきます。



「お帰りなさい 漱石祭」が開催されました

4月13日、夏目漱石が旧制第五高等学校(現在の熊本大学)の英語教師として赴任してから120年を記念し、「お帰りなさい 漱石祭」が開催されました。漱石は1896(明治29)年のこの日に池田駅(現 JR上熊本駅)に降り立ったとされ、JR上熊本駅では蒲島県知事、大西熊本市長、原田学長、くまモンらが、劇団員扮する漱石先生を歓迎しました。

漱石が熊本滞り期間中、五番目に住んだ内坪井の旧居前では、壺川小の児童らが出迎える中、漱石先生が人力車で現れました。その後、横断幕を手にした漱石先生と関係者を先頭に、県警音楽隊の演奏で歓迎パレードがスタート。城東小児童や、マントを纏い五高時代の学生に扮した熊大生らおよそ150名が市内のアーケードを練り歩きました。



アーケード街でのパレードの様子

熊本大学グローバル教育カレッジ棟オープニング記念イベントを開催しました

熊本大学のグローバル教育推進のシンボル施設として整備した「グローバル教育カレッジ棟」の竣工と利用開始を記念して、4月6日(水)にオープニングイベントを開催しました。

記念式典ではモーリーン&マイク・マンズフィールド財団の園田隆則氏による特別講演を実施し、熊本県内外の学校教育関係者約100人が参加しました。

続いて一般参加イベントとして、英語での授業体験や、平成29年度に開設するグローバルリーダーコースの説明会等を実施し、高校生や大学生ら100人以上が参加しました。参加者からは「世界で働くコミュニケーション力をつけたい」「大学在学中に留学したい」

等の声が聞かれました。グローバル教育カレッジでは、英語による教養科目(グローバル科目)の授業のほか、在学生の英語力向上を支援する授業外活動



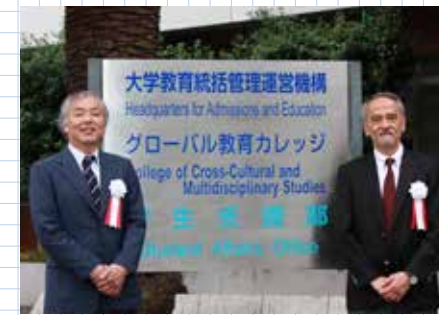
くす玉割りの様子

「english-TALKmon」や、高校生等に大学入学前に国際的に学べる環境を提供する「熊大グローバル Youthキャンパス事業」のイベントなどを実施していきます。



授業体験「Living in a Globalized Society」

大学教育統括管理運営機構設立記念式典を開催しました



熊本大学大学教育統括管理運営機構案内板前にて(右から原田学長、古島機構長)

熊本大学は、6月1日(水)、「熊本大学大学教育統括管理運営機構」の設立記念式典を学内で行いました。

同機構は、従来本学に設置していた「大学教育機能開発総合研究センター」及び「教養教育機構」を廃止し、全学共通教育における教育の質を統括管理するガバナンスの高い組織として6月1日に設置したものです。変容する入試制度と多様な入学者に対応し、これまで蓄積されてきた膨大な教学データ

を基に大学のビジョンと戦略から全学共通教育を構築し、本学が掲げる教育目的を達成するための中心的役割を担うものであり、入口から出口まで一貫した教育の質を保証するため、入試、教養教育、評価を統括管理する機能をもった新たな組織となります。式典には本学関係者約40名が参加し、学長挨拶に続いて、同機構施設玄関前にて看板除幕式が行われ、その後、同機構長による概要説明が行われました。

恒例の「地下と地上の文化財散歩」を開催しました

文化財散歩は、発掘調査※で明らかになったキャンパスの歴史を、現地を歩きながら追体験する催しです。今年は6月27日~7月1日、黒髪地区と本荘地区で実施しました。

黒髪地区では、約3700年前の縄文人骨や、奈良・平安時代の「國」文字の土製印が出土した地点などを巡りました。埋蔵文化財調査センターの展示室では、縄文土器や明治の赤煉瓦などの遺物に触れることで、往古を体感して頂きました。

本荘地区では、古墳時代から平安時代に続く集落、江戸時代の水路などが見つかった地点を巡り、本荘北地区の遺跡の移り変わりや人々の生活について紹介しました。

今年は熊本地震の影響で「散歩」の実施時期が梅雨にずれ込んだにもかかわらず、学生・教職員・一般の方50名の参加がありました。

参加者からは「熊大の中にこんなに遺跡があると知って驚きでした」「文献などの記録はないのですか？」などの感想・質問が寄せられました。



埋蔵文化財調査センターの展示

煉瓦造りの重要文化財!

足下は古墳時代の村(本荘遺跡)

※熊本大学は県内有数の遺跡の上にあるため、学内の整備等で遺跡の破壊が避けられない場合、埋蔵文化財調査センターが事前に発掘調査を行っています。



【原画】松永 拓己／教育学部 准教授

立ち込める雲のようなもやは、今回の熊本地震をあらわし、その中で未来を担う子どもと手を差しのべる熊大生を描いています。また、熊本大学のシンボルである五高記念館は、地震の被害を受けましたが、そのような中でもキャンパス内に多く植えられている銀杏の木はまっすぐに上を向いて伸びています。歴史と伝統、そして創造する森に生きる熊大生の姿を象徴しています。